

植 物 園

福島和子



＜著者略歴＞

福島和子（ふくしま かずこ）

1952年4月、埼玉県児玉郡美里村に生まれる。美里村立松久小学校、美里中学校、県立本庄高等学校を経て、1970年に埼玉県立教員養成所に入学。卒業後、埼玉県志木市立宗岡小学校、宗岡第三小学校に勤務し、1980年に依願退職する。

1982年に結婚、所沢市に住む。1987年に病気のため、35歳で死亡。

植
物
園

平成二年一月十二日 発行

著 者 福 島 和 子

発 行 者 田 淵 増 雄

〒359 所沢市小手指三一―一三

小手指ハイム棟五一二

電話・〇四二九―四八―五八〇一

制 作 主婦の友出版サービスセンター

〒101 東京都千代田区神田駿河台一―六

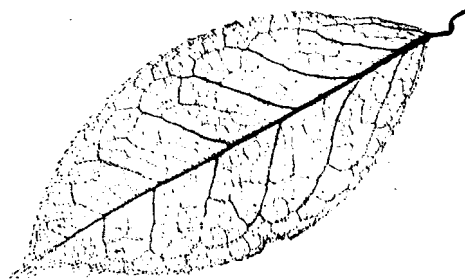
お茶の水スクエアC館二階

電話・〇三―二九四―三六二四

印刷・製本 星野精版印刷株式会社

植物園

福島和子



植
物
園

装丁 小池 眞夫

芝生の上にまず彼女の上半身だけあらわれる。日を浴びた斜面の芝生の上に彼女はゆっくりと歩いてくる。風が強い。スカートのすそがはためいている。うつむきかげんにして胸のところに本を抱えている。たぶん、子どもの英語のテキスト。

彼女のたてる音はまるできこえない。真空の中にいるように静かに歩いてくる。

まだ、眺められていることに気付かない。目の前を通り過ぎようとする。多世ははじめ小さく、つぎにすこし強く窓ガラスをたたいた。

彼女がこちらを向く。無表情のまま。——やっと微笑した。

先廻りして玄関の扉を開けてやる。

「帰っているかしら」と、家庭教師が自分の生徒のことを訊く。怪訝な顔をして多世は壁の時計を見上げる。その視線を家庭教師が追い、それからふたりは顔を見合わせる。また間違えたわ、と家庭教師がつぶやく。約束の時間より一時間はやい。

多世は彼女を居間に通す。それからお茶の仕度に取りかかる。

「きのうは二時間間違えたわ。夕がた、セブン・バーに行ったら開いていなかったの」

家庭教師が溜息をつく。「ああいうのはこわいものね」

砂糖壺が見つかからない。昼に使ったばかりなのに。多世は立ったまま視線だけをあちこちに向ける。それから、いくらかぼんやりとひと廻り眺めまわす。さらにもうひと廻りする。彼女は、意を決したように、非常な勢いで食器棚のすべての戸をひらき、引き出しという引き出しをひき出しにかかる。台所中が剥き出しにされる。あちこちのバーをたたきまわっている女を想像する。バーはどこも閉まっている。そのうちに女は町中の戸が閉まっているような錯覚をおこし立ちすくむ。見たこともない町。多

世は頭をかかえる。剝き出されたひとつの抽き出しに手をかける。ひきぬいてしまおうとする。

彼女の想像は誇張されている。それにバーをたたきまわっている女は誰かわからない。

食卓の上に白い陶器の砂糖壺が見い出される。

ふたりは黙っている。冬の日が部屋の中に斜めに差しこんでいる。

風の音がする。

「いつ出ていくの」と、多世が訊く。彼女は必ずこう訊く。

「律子さん」

多世は知っている返事を催促する。彼女の目は大きく見ひらかれている。

「たぶん、もうすこしで」と、律子が答える。彼女はいつもこう答える。

その日、多世はここでひきさがらない。彼女は非常な確信をこめて言う。

「長くても、あと一か月とはいわないわ」

律子はいくらか苛立たしげな表情をみせるが、それはすぐに消える。ぼんやりした顔になる。

「あと一か月で出ていくのは無理よ」

律子の指がきょうのテキストのページを折りつづけている。一冊すっかり折ってしまふ。細長い指が、こんどは最後のページからそれをのぼしにかかる。それもやり終える。ふくらんでしまったテキストの端を指がしっかりはさむ。それをソファアの上
に放り出し、彼女は繰り返す。「無理だわ」

多世はガラス戸の外を見る。芝生とその向こうに広がる薄い色の空しか見えない。

芝生を一匹の灰色の猫が登ってくる。今しがた律子が登ってきたのと同じところを通ってくる。ときどき猫のつやのある背しか見えなくなる。猫が立ち止まって何かを見ている。耳をそばだて、別の方向に目をやる。また歩いてくる。

「東京で仕事をみつけているの？」と、多世が訊く。

律子の苛立たしげな表情がふたたびあらわれ、こんどはそれが固定される。

「いいえ。出ていくときはただこの町を出ていくだけだわ」

多世は繰り返す。

「あなたはあと一か月としないわよ。わかるわ」

律子の顔に一瞬怯えた表情がうかんで消える。彼女は、なぜ、と訊きかけてやめる。多世は律子がそう言いかけようとしたのを見てとる。

勝手口の扉が風にあおられてばたんばたんと呼り出している。ふたりともそちらの方へきき耳をたてる。

台所で、何か軽い箱のようなものが落ちた音がする。つづいてもっと重いものが棚か何かに飛び乗った音。

「猫よ」と多世が言う。

「ええ」と律子がうなずく。

多世が立ち上がる。その背に向かって、もう食べものをやってはいけないのよ、と律子が注意する。

子どもは帰ってこない。冬の日は急速に傾いてしまった。空の赤い部分に鼠色の雲がとばされてきて堆積してゆく。たぶん、子どもは英語を習いたくないのだ。彼の学校の教科に英語はない。まだ当分ない。小さいうちに英語を習わせようというのは父親の意見だが、かといって母親が反対したわけでもない。子どもの母親はその点についてよくおぼえていない。子どもは町のアメリカ人の女性のところに英会話を習いに行っていたのだが、その先生が出産のため三か月ばかり塾を閉じるので、その間、忘れないように律子にみてもらうことになったのだ。確か、これは律子がかって出たような気がするが、この点についてもあいまいな成りゆきで多世はやはりはっきり思い

出すことはできない。

「おいとまするわ」

律子はテキストを膝の上に取り上げる。立ち上がりかけた律子を多世が見上げる。

「おととい、あなたが学生のような男の子と話しているのを見たわ。バス・ターミナルのところの喫茶店で」

ガラス戸を背にして律子は立っている。彼女は陰になっている。

「ええ」と律子がうなづく。彼女はそのまま玄関に先に立って行く。

多世が立ち上がる。

律子が振り向いて言う。

「まえ、わたしの生徒だった子。浪人しているの」

彼女は去年までこの町の私立高校の教師だったのだ。彼女は四年間教師だった。

「あなたが呼び出したの？」

律子は怪訝な顔をする。多世は玄関に灯を^{あかり}ともすのを忘れてしまっている。暗がり

のなかで律子の顔がかたくなってゆく。

多世はつづける。

「あなたばかりしゃべっていて、男の子はふてくされているようにもこわがっているようにも見えたわ。通りに面した窓側の席に向かい合っていたわね」

律子が微笑む。

「すこしとくべつな子で、」律子の微笑はさらに明確になる。暗がりには白い丈夫そうな歯がのぞく。戸外で何かが風に吹きとばされてころがっていく軽い金属音がする。「あの子、きらいだったわ」音が止む——「こわかったの」ふたたび軽い音が始まる。遠ざかっていく。「でも、おとといはね、」

低い笑い声を洩らしながら向きを変えようとする律子の肩を多世が押さえる。

「あのひとは？」

多世の声の調子がまるで嘆願するようになってゆく。

「下の、楠の木のある家にきているひと。都丸さんの妹で都丸さんが外国へ行ってい

るあいだ留守番するっていうひと」

取り乱しそうな多世の顔を律子が不安そうに見る。多世の声はすこし震える。

「猫がいるのに二週間も遅れてくるのはおかしいと言っていたでしょう。都丸さんが留守をたのむのは飼い猫がいるからでしょう。二週間もほうっておいたのよ」

律子が多世の腕を両手で取り、それからそれを押し返す。

「きれいなひとだと思わない？ セブン・バーにくるわよ」

律子は扉を開ける。多世がうちひしがれたように立っている。扉を押したまま、律子が多世を眺める。

「間違えたわ。彼は浪人ではなくて画学生だわ、どこかの学校の」

多世がぼんやりと律子を見返す。律子がつづける。

「あの子、絵を描くように見えないかしら。どう？」

半びらきの扉から風が吹きこんでくる。ごめんなさい、と律子と言う。

「わからないけど、」

多世はうわのそらのように見える。

「でも、描くのよ」

ええ、と多世がうなずく。多世のまえで扉が静かに閉じられる。

多世が暗い居間のガラス戸から戸外を眺めている。肩で凭れ、振り向くようにガラスにこめかみを押しあてている。空の下のように最後の光がある。朝からの風の勢いはいっこうに衰えをみせない。暗い家は静まりかえっている。テーブルの上の茶碗はまだ片付けられていない。濃さを増してゆく闇の中にふたつの白い茶碗がふたりのいた位置のまま対置している。それで多世はよけいに身動きできない。彼女は振り向くのがいやなのだ。彼女はただ子どもが帰るのを待っている。

五十メートルほど先の同じ高台のアパートの三階の窓から、同じ姿勢で律子が下を

見ている。彼女もやはり暗い室内で黒い影のようになって窓にはりついている。アパートは高台の縁に建っており、眼下には楠の大木が枝を広げている。その窓からの景色を多世は知っている。一度だけ見たことがある。都丸家は大楠にさえぎられてほとんど見えないはずだ。日が落ちてから、楠の葉陰に灯がまたたくのを多世は知っている。律子はその灯^{あかり}を見ている。

空はすっかりあかるさを失った。雲の動きは非常にはやく星が見え隠れしている。多世は家中のどこにも灯^{あかり}をともしのを忘れてしまっている。彼女はもはや戸外をも眺めていない。うつむき、片手をガラスにはわせて長々とのぼし、凭れ立っている。家中に寒気がしのびこんでくる。

窓の外は暗く、そのうえひどい風なのでほとんど何も見わけられないしきこえもない。崖したに枝を広げた大楠はざわめく暗い沼のように思われてくる。ガラスに顔